

# 科学コミュニケーション 研修プログラムのご案内

平成27年2月 独立行政法人 科学技術振興機構



Center for Science Communication 科学コミュニケーションセンター

### どうして科学コミュニケーションが必要なのでしょうか?

2011年8月19日に閣議決定された第4期科学技術基本計画では基本方針のひとつとして「『社会とともに創り進める政策』の実現」が掲げられ、その中で、社会と科学技術イノベーションとの関係深化のために、科学や技術についてのコミュニケーション活動の推進が重要であると示されました。その推進方策として、国は「一定額以上の国の研究資金を得た研究者に対し、研究活動の内容や成果について国民との対話を行う活動を積極的に行うよう求める」としています。また、東日本大震災を受け、科学技術を担う専門家(研究者)のあり方、研究者が行うコミュニケーション活動について、改めて社会から問い直されています。

その一方で、2012年度に科学技術振興機構(JST)科学コミュニケーションセンターが研究者に対して行った、科学コ

ミュニケーション活動に関する大規模なアンケート調査の結果から、科学コミュニケーション活動に取り組むためにはさまざまな支援が必要であり、また、研究者が望む科学コミュニケーションへのマインド育成やスキルアップに向けた研修ニーズは、科学コミュニケーション活動経験がある研究者とない研究者で異なることがわかっています。

JST科学コミュニケーションセンターがプログラム開発や実施を支援する「科学コミュニケーション研修」では、非専門家や異分野・他分野の研究者、新聞記者等のメディア、さらに広くは市民全体に対して、科学者が自身の研究の目的や成果を効果的に分かりやすく説明し、対話できる力を育むことをミッションとしています。

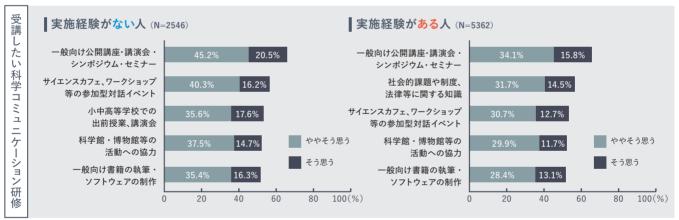
### 研究者が持つ科学コミュニケーション研修への期待やニーズ

科学コミュニケーション活動の計画立案には、具体的なイメージが必要です。活動未経験者には、まず、この具体的なイメージが抱ける、「最初の一歩」を後押しするような支援を欲しています。

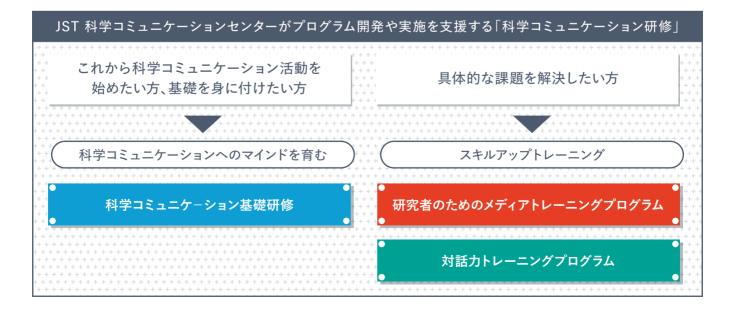
一方、活動経験者は、取り組みを社会的な活動として捉え、

「社会的課題や制度、法律等に関する知識」など、より高い障壁を越えるための研修を求めています。

こういった期待やニーズの違いに応じて、画一的ではない研修プログラムの内容や組み合わせ、きめ細やかで柔軟な研修計画が、効果的な研修につながります。



出典: JST 科学コミュニケーションセンター『研究者による科学コミュニケーション活動に関するアンケート調査報告書』(2012年度)



## 科学コミュニケーション基礎研修

科学技術コミュニケーションの最初の一歩を踏み出すための基礎研修 です。科学技術コミュニケーションの必要性が叫ばれるようになった 背景・歴史を知り、簡単なプレゼンテーションに関するワークショッ プを行うことで、受講者自身の中にある「マインド」に気付く、あるい は「マインド」を育むきっかけとなることをねらいとしています。 実践経験がない、あるいは浅いために、行動を起こすことを躊躇して いる方、あるいはすでに経験は積んできたが、今一度、科学技術コ ミュニケーションの意義を見直したい方に、講義とワークショップ を組み合わせた研修を提供します。

Science Communication Training for Beginners



対象受講者 研究者/大学院生

身につくスキル

科学技術コミュニケーションの背景や歴史に関する知識

プレゼンテーションの基本スキル

トークイベントを設計する基本スキル

#### 内容

3つのモジュール(講義とワークショップ2種)に分かれています。組み合わせや所要時間はご希望に応じます。

研修モジュール	概 要	所要時間	対 象	人数
講義 「科学コミュニケーションとは」	科学技術の進展に伴って、さまざまな場面で双方向の コミュニケーションが求められるようになっています。 その時代背景と科学コミュニケーションの歴史、必要性 について理解します。	30~ 60分	これから実践活動に取り組もうという方 これまでの活動を見直したい方	~50名
演習 「3分で伝える専門用語」	科学の専門用語を3分間で説明する演習です。専門的 内容について分かりやすく説明する工夫を、2人または 4人でのワークショップで体験します。	30~ 60分		3~50名
演習「研究紹介デザイン」	研究所の一般公開や出前授業といった場面を想定したトークを中心とするイベント(15分~45分)をデザインします。限られた時間の中で効果的に情報を伝えるノウハウを、2人または4人でのワークショップで体験します。	30~ 60分		3~50名

※所属・役職は 開発当時のもの

開発メンバー 戸田山和久 名古屋大学大学院 情報科学研究科 教授/齋藤芳子 名古屋大学高等教育研究センター 助教 \*対象にあわせたカスタマイズやオプションの提供は、開発メンバーのほか、実施主体および認定講師も行っています。

実施主体 ※所属・役職は 2015年2月現在 小泉周 自然科学研究機構 研究力強化推進本部 特任教授/JST 科学コミュニケーションセンター フェロー

日本科学未来館(森田由子、早川知範)/大崎章弘

認定講師 ※所属・役職は 2015年2月現在

実 績 2012~2013年度 筑波大学

2012~2013年度 芝浦工業大学

2012~2013年度 教員免許状更新講習(小中高等学校教員)

関谷翔 JST 科学コミュニケーションセンター アソシエイトフェロー

2012~2013年度 日本科学未来館定期開催 ※2012年は1回、2013年は5回

2012~2014 年度 埼玉県立総合研究センター

2012~2014年度 独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構

2013~2014年度 総合研究大学院大学

2013~2014年度 大阪大学

2014 年度 奈良先端科学技術大学院大学

2014年度 農林水産関係中堅研究者研修 … など、これまでに計約800名が受講

# 研究者のためのメディアトレーニングプログラム

科学とメディアの接点において、研究者や広報担当者がジャーナリストとコミュニケーションをとることは避けられません。 「メディアトレーニングプログラム」は、媒体に適した情報発信手法や、広報担当者との効果的な連携のしかた、大きく注目されている社会問題に対して発言する際の留意点など研究者に求められるメディア対応能力に焦点を当てたトレーニングプログラ

研究を効果的に発信するだけではなく、社会から発言を求められた時にどう対応すべきか、という範囲までカバーしている点が特徴です。

プログラム内容は、一般の取材対応やテレビ・ラジオへの出演、 研究者によるソーシャルメディアの活用など、ニーズによって 変更できます。

対象受講者 研究者/大学院生/広報担当者

Media Training Program for Scientists



#### 身につくスキル

基本的なメディア対応スキルが身に付きます。

媒体ごとに適切な情報発信ができるようになります。

インタビュー、記者会見、ラジオやテレビ出演といった場に臨む準備ができます。

所属機関広報との連携のしかたがわかります。

### 内容

このプログラムでは、依頼者の研究分野や所属する機関によってメディアとの接点が異なるという点を考慮しています。 そのため、依頼者のニーズに応じて次のような複数の講義/実践モジュールを組み合わせて構成しています。

- オーディエンスを理解する
- メディア対応の必要性と基本的な注意点
- 専門的知識をわかりやすく説明する為のワークショップ
- 研究のビジュアライゼーション
- 媒体やオーディエンスごとの対応の仕方
- 模擬記者会見や相互取材を用いたワークショップ
- サイエンスライティング講座
- 所属機関広報との協働

こうしたモジュールの選択・ 組み合わせや、レクチャーと ワークショップの時間配分などは、 ご希望に応じます。

人数:10~30名程度 所要時間:3~8時間程度

開発メンバー 田中幹人 早稲田大学政治学研究科ジャーナリズムコース 准教授

※所属・役職は 一般社団法人 サイエンス・メディア・センター スタッフ(菊地乃依瑠、野地実穂、西村尚子、坂巻たみ、角林元子 ほか)

**実施主体** 一般社団法人 サイエンス・メディア・センター(2010 年 10 月設立)

実績 2012年 9月 日本科学未来館(参加者:12名)

2013 年 11 月 筑波大学(参加者: 11名) 2014 年 10 月 大阪大学(参加者: 5名)

同 年10月 奈良先端科学技術大学院大学(参加者:20名)

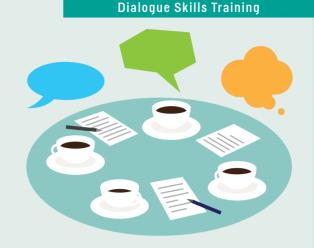
同 年11月 独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構(参加者:30名)…他多数

# 対話力トレーニングプログラム

「対話カトレーニングプログラム」は、社会と研究者との「対話」 に、より重点を置いたトレーニングプログラムです。

このプログラムは、科学を社会に説明したり、科学を広めたりするための一方向的なコミュニケーションだけではなく、科学者自身が社会のなかでの自身の立ち位置について考えるために、様々な価値観や倫理観をもった人々との双方向的な「対話」が行われることが重要であるという考えの元に開発されました。「伝える」スキルだけでなく「きく(Ask or Listen)」スキルにも焦点を当てていることが特徴です。

### 対象受講者 研究者/大学院生



#### 身につくスキル

自身の研究内容や成果について、状況に合わせた紹介ができるようになります。

自身の研究を社会の中に位置づけて捉え直すことができるようになります。

対話を通じて感動、共感を得られるようになります。

#### 内 容

このプログラムは、次の3部で構成されています。

- 1. 事前研修
- 2. 対話の場(サイエンスカフェなど)における実践
- 3. 実践の振り返り
- \*事前研修のみの提供も行っています。

事前研修では、対話の際に起こりうるコミュニケーションの特徴やギャップを 簡単なゲームを通して体験したり、社会との対話の必要性やその意義について ディスカッションをしたりします。また、実際のサイエンスカフェで収録されたビ デオデータを用いて、対話技術を学びます。

その後、実際にサイエンスカフェなどの対話の場を経験していただきます。 この時に行われる対話の様子を収録し、実践後の振り返りで使用します。



人数:10~30名程度

所要時間:2時間程度 \*事前研修のみの場合

開発メンバー 加納 圭 滋賀大学教育学部 准教授/京都大学物質-細胞統合システム拠点(iCeMS) 特任准教授

※所属・役職は 水町衣里 京都大学物質 - 細胞統合システム拠点(iCeMS) 特定研究員

高梨克也 京都大学学術情報メディアセンター 産学官連携研究員 元木 環 京都大学情報環境機構/学術情報メディアセンター 助教

森 幹彦 京都大学学術情報メディアセンター 助教

森村吉貴 京都大学情報環境機構/学術情報メディアセンター 助教 秋谷直矩 京都大学物質-細胞統合システム拠点(iCeMS)特定研究員

加藤和人 大阪大学大学院医学系研究科教授/京都大学物質一細胞統合システム拠点(iCeMS) 特任教授

実施主体 一般社団法人 社会対話技術研究所(2015年1月設立)

**実績** 2012年 2月 京都大学(参加者:10名)

同 年11月 京都大学(参加者:5名)

同 年12月 総合研究大学院大学/静岡科学館(参加者:15名)\*事前研修のみ

2013 年 7月 京都大学(参加者:5名) 同 年12月 京都大学(参加者:7名)

2014年 4月 広島大学(参加者:18名)\*事前研修のみ

同 年10月 奈良先端科学技術大学院大学(参加者:18名)

注1:この他、関連プログラムの実施10件。

注2:上記の実績は、対話カトレーニングプログラム 開発チームによって実施されたものです。

